大正四年六月二十一日第三種郵便物認可（毎月一日一回發行）

京都帝國大學經濟學會

經濟論叢

第二十五卷　第一號

昭和二年七月一日發行

論叢

公益團體の課稅……法學博士　神戸正雄

マルクスの農業勞働者に關する見解……法學博士　河田嗣郎

ミルのエソロヂー論……文學博士　米田庄太郎

時論

上海中立に關する一考察……法學博士　木廣重雄

說苑

宗門人別改制度の沿革……經濟學士　菊田太郎

工業分布論に關する文獻……經濟學士　黑正巖

雜錄

精神勞働者と獨逸所得稅法……法學士　汐見三郎

獨逸都市に於ける乘合自働車交通……經濟學士　山口信男

スミスとリストの經濟發達階段說……經濟學士　上田藤十郎

京都帝國大學經濟學會大會記事

法令

國債整理基金特別會計法中改正・不良住宅地區改良法・土地賃貸價格調査委員會法・土地賃貸價格調査委員會法施行規則

（禁轉載）

ミルのエソロヂー論

米田庄太郎

「ミルの社會學概念」（本雜誌本年三月號）及び「ミルの經濟學概念」（本雜誌本年四月號）中に述べし如く、ミルは一般的社會科學としての社會學も、亦特殊的社會科學としての經濟學も、總て社會科學は直接にはエソロヂー即ち性格學、一層詳しく云へば性格形成學（the Science of the Formation of Character）に基いて建設されるものと考へたのである。されば彼の社會科學全體の概念を深く理解する爲めには、吾人は更に進んで彼が性格學或は性格形成學と云ふは、如何なるものであるかを考究せねばならぬ。然るに彼の性格學と稱するものは、つまり人性の一般的原理及び法則、即ち心理學の原理及び法則に基いて建設されるものであるから、其の如何なるものであるかを根本的に理解するには、吾人は更に彼の心理學の概念から考究し始めねばならぬ。尙ほ又さきの論文によりて知らるゝ如く、ミルは一切の社會科學は結局心理學を最後の基礎となすものと考へたのであるから、彼の心理學の概念をよく理解することは、彼の社會科學論を根本的に理解する爲めに、甚だ肝要であるのである。

(一) 心理學の概念

今ミルの考へる處によれば、恒定的法則に從ふて相續いて生起する諸事實は、假令其の法則はまだ發見されて居なくとも、又吾人の現に有する手段方法によりては、發見し得られないものでさえあるとも、夫れ自身に於ては總て科學の對象となるに適するのである。そうしてかゝる事實或は現象に關しては、吾人は勿論精密ではないが、併し近接的に眞實なる一般的命題を、科學的方法の適用によりて定立することが出來る。且つ又かゝる近接的な一般的命題は、吾人の實際的目的に對しては、精密な法則と大體上同等な意義や價値を有するのである。物理的諸科學にありても、總てが既に精密科學となつて居るのでなく、今尙ほ只近接的眞理を表現する一般的命題を定立するだけに止まるものが少くない。かの氣象學や潮汐學は其の適例である。そうして人間の思想、感情、意志、感覺、行動等、つまり心理的現象と稱せられるものゝ科學卽ち心理學も、其等の科學と同樣な意味にて科學として存立し得るのである。

夫れ心理的現象とは心意或は意識の諸狀態を意味する。そうして心意の法則或は心理的法則とは、つまり其等の心意の諸狀態の繼起の齊一、卽ち一の心理的狀態が他の心理的狀態に續いて起る、詳しく云はゞ一の心理的狀態が他の心理的狀態を原因として、生起し或は續起する法則を云

ふのである。併し心理的法則を此の如く心理的諸狀態夫れ自身間の因果的關係と見るに就ては、一派の生理學者間より異論が起るかも知れない。其等の生理學者の說によれば、一切の心理的狀態は夫れ夫れ一定の腦髓或は神經の狀態によりて產出されるものにして、夫れ自身獨立に存立するものでない、隨ふて一の心理的狀態は夫れ自身で他の心理的狀態を惹起するのでなく、一の心理的狀態の原因たる一定の腦髓或は神經狀態が、他の心理的狀態の原因たる他の一定の腦髓或は神經狀態を產出することによりて、此處に一の心理的狀態と他の心理的狀態との關係が成立するのである。要するに心理的狀態夫れ自身間に直接な因果關係が存在するのでなく、其の原因たる腦髓或は神經狀態間に存在する直接な因果關係に基いて、心理的狀態間の關係が成立するのである。

云ふまでもなく心理學と生理學との關係は決して看過されても亦輕視されてもならない。心意の法則は動物的生活の法則から生來する派生的法則であり得ると云ふこと、夫れ故に心意の法則の眞理は、結局生理的條件に依存するかも知れないと云ふことは、吾人の決して忘れてはならぬ點である。そうして生理的狀態或は變化が心理的機起の上に及ぼす影響を研究することは、今日の心理學的研究の最も重要なる一方面である。さればとて心理學的分析の特殊な方法を全く排斥し、只生理學が今日與へるが如き與料にのみ基いて心意の理論を建設せんとするは、理論上の一

大謬見であるばかりでなく、實際上の一層重大なる謬見であると思ふ。心理學はなるほどまだ不完全なものであるが、しかも夫れに對應する生理學の部分よりも、遙かに大なる進歩をなして居る。そうして生理學の爲めに心理學を放棄せんとするは、歸納哲學の眞の原則に背くことであつて、それは人性の科學の甚だ重要なる諸部門に於て、當然謬れる論結を生ぜねばならぬと、否な現に生じて居ると思はれるのである。

とにかく心意の諸狀態間に繼起の諸齊一が存在し、そうして其等の齊一が觀察及び實驗によりて確立され得ることは爭はれない事實である。更に各心理的狀態は一の神經狀態を、其の直接前件及び近接原因として有すると云ふことは甚だ眞らしいが、しかも今日までの處ではまだ感覺に就ての如くに、決定的な仕方で證明されて居ない。又夫れが確實であるとしても、吾人はまだ其等の神經狀態の特質を全く知らない。吾人は其等の神經狀態の一が、如何なる點に於て他から異なつて居るかを知らないし、又之を知る手段も今日の處では有つて居ない。そうして其等の神經狀態の繼起或は共存を研究する唯一の方法は、論者が其等の神經狀態を原因として生起すると想像する心理的狀態の繼起及び共存其の物を、觀察する事であらねばならぬ。されば心理的諸現象間の繼起は吾人の神經組織の生理的法則から演繹される事は出來ない。そうして心理的現象間の繼起に關する一切の眞實なる知識は、永久ではなくとも少なくも長い間、ヤハリ心理的繼起其の

物の直接研究(觀察と實驗とによりて行はれる)に於て求められて行かねばならぬ。要するに心理的現象の秩序は其等の現象其物に於て研究され、決して一層一般的な何れの現象の法則からも演繹されてはならないのであるから、かくて心理學は何れの他の科學にも從屬しないで、判然他から區別される一の科學として存立するのである。

さて以上述べ來りし處によりて見れば、心理學の主題は心理的繼起の諸齊一、卽ち一の心理的狀態が依て以て他の心理的狀態に繼起する處の最後の又は派生的な諸法則である。そうして其等の諸法則の或ものは一般的にして、他のものは特殊的である。此處に最ども一般的な法則を擧れば、夫れは第一には、何れの意識狀態も其の原因の如何を問はず一たび生起すると、度合の劣れる同一の意識狀態、卽ち性質に於ては同樣であるが、併し强度に於ては劣れる意識狀態が、最初に夫れを生起させた原因が現存しなくとも、復生されることが出來ると云ふ法則、ヒュームの言葉を借りて云はゞ、各印象は其の觀念を有すると云ふ法則である。第二には此等の觀念卽ち第二次的な心理的狀態が、印象又は他の觀念によりて惹起される連合の法則である。そうして只實驗的研究の普通の諸方法によりてのみ、確立され得る此等の單純な或は元素的な法則よりして、此處に思想及び感情の一切の複合的法則が產出される、又產出されねばならないのである。併し吾人は只如何にして單純な元素的法則からして、複合的法則が產出されるかを究明するだけで滿足

してはないので、更に複合的法則を複合的な心理的狀態に就てよく徵驗せねばならぬ。

尙ほ此處に注意せねばならぬ事實がある。夫れは相異なれる個人心が同一の心理的原因の作用に對して、種々相異なれる度合に於て反應すると云ふ事實である。そうして此の心理的反應性の差異は、先づ第一には原本的な最後の事實であり得るし、第二には其等の個人の以前の心理的歷史の結果であり得るし、第三には身體組織の差異に依存し得る。個人の以前の心理的歷史が、個人の心理的性格の全體を產出し又は變更することに、一定の貢獻をなすと云ふ事は、心意の法則の避く可からざる結果である。併し身體的構造の差異が之れと協力すると云ふことも、ヤハリ總ての生理學者が承認し、且つ一般的經驗によりて確定されて居る事實である。然るに此の事實は只粗雜に承認されるだけに止まりて、まだ之れに詳しき分拆が加へられて居ない、そうして夫れが爲めに、眞實なる知識の進步に對して甚だ有害なる仕方にて、經驗的概括の基礎とされて居る。それで吾人は此の事實を詳しく分拆して、正當なる知識を求めることが甚だ肝要である。

今諸人の心理的性向或は反應性に於て現實に存在する自然的差異が、彼等の有機的素質に於ける差異と、屢々聯結して居ると云ふことは確かに事實である。併し夫れが爲めに吾人は、其等の有機的差異は總ての場合に於て、心理的現象に直ちに其儘で影響するものであると考へてはならぬ。其等の有機的差異が心理現象に影響を及ぼすのは、屢々心理的原因の媒介に依つてゞある。

そうして心意の一般的法則が精密に認識され、巧みに個人の心理的特異性の説明に適用される場合には、吾人は普通に想像されて居るよりは遙かに多く其等の特異性を説明し得るのである。要するに少なくも人間にありては、教育及び外部的境遇に於ける差異は、性格の最大部分の充分なる説明を與へ得る事、及び其の殘りの部分は、同一の外部的又は內部的原因によりて諸人に於て產出されたる感覺に於ける生理的差異によりて、主として説明され得ることは確實である。併し其等の仕方にて説明されることを許さないと思はれる一定の心理的事實も存在する。其の最ども顯著なる例は動物の諸本能、及び之れに對應する人性の諸部分である。併し此の場合に於ても有機的條件の詳しき性質はまだ究明されて居ない。そうして其他の何れの心理的現象の部類にありても、本能に於て見るが如く、有機的原因が直接な影響を及ぼすと云ふことはまだ確かめられて居ない。しかも今や腦髓及び神經系統の生理學は迅速に進步しつゝあるから、其等の問題の精確なる解釋も追々遂成されるであらう。

ミルの心理學の概念は大體に於て以上述べ來りしが如きものであるが、然らば彼はかゝる心理學概念に基いて、如何に彼の性格學（エソロヂー）と稱するものゝ概念を決定せんとしたか。

（二）性格學の概念

ミルの論ずる處によれば、前節に述べしが如き心意の法則は卽ち人性哲學の普遍的或は抽象的部分をなすものにして、一般的經驗の一切の眞理は夫れが眞理である以上は、其等の法則の結果或は後件であらねばならぬ。そうして實生活の觀察から後天的に集成されたる其等の一般的經驗の眞理は、科學の眞理間に於ては經驗的法則と稱せられるものである。然るに經驗的法則の保有する何れの眞理も、原因的法則から派生するものであるから、吾人は經驗的法則を原因的法則によりて說明するに非らずば、まだ眞實なる科學的眞理を發見したと云ふことが出來ない。要するに眞實なる科學的眞理を構成するものは、經驗的法則でなくして、之を說明する原因的法則である。されば知られたる原因に依存する現象、隨ふて一の一般的理論が構成し得られる現象の經驗的法則は、其の實際的價値は如何に大なるとも、科學に於ては理論の結論を徵驗すると云ふより以外の機能を有しない。尙ほ此の事は經驗的法則の最多數が、觀察の限界內にありてすら、只近接的概括に過ぎない場合に於ては、殊に眞實であらねばならぬ。併し此の事は人々の時としては想像するほど精神科學の一特異性であるのでない。經驗的法則が精確に眞實であると云ふのは、只科學の最とも單純なる諸分枝に於てのみ見られ得る事であつて、尙ほ其等の諸分枝にありても常にそうであると云ふのでない。されば より複雜なる科學の諸分枝にありては、一般に經驗的法則は只近接的概括に外ならないのである。かくて心意の經驗的法則が、只近接的概括に過ぎない

と云ふことは、決して科學としての心理學の價値を減損するものでない。

今人間心意に關する種々なる事情を考慮すると、其の經驗的法則、卽ち人間の感情或は行動に關して遂成され得る概括が、近接的概括以外のものであり得ないことは當然であるので、隨ふて吾人は一の個人或は國民或は時代に就て立てたる經驗的心理法則を、夫れが依存する原因の法則に分拆し、そうして其等の原因が他の個人或は國民或は時代に於ても働いて居ることを確かめるまでは、決して他の個人或は國民或は時代に適用してはならない。是れ各個人は他の各個人、各國民は他の各國民、各時代は他の各時代と夫れ夫れ異なれる事情によりて包まれ、そうして此等の差異の何れも、夫れ夫れ異なれる性格定型を形成する上に、夫れ夫れ一定の影響を及ぼすからである。要するに絶對的意味に於ては、總ての人類に共通する感情或は行爲の樣式と云ふが如きものは殆んど存在しない。隨ふて行爲或は感情の何れかの樣式を以て、人類間に普遍的に見出されるものなるを肯定するが如き概括は、科學的命題とは認め得られないのである。しかも人類間に見出される感情及び行爲の一切の樣式は、夫れ夫れそれが產出される原因を有し、そうして其等の原因を規定する命題に依て、經驗的法則の說明が與へられ、又其等の法則に對する吾人の信賴を限定する原理が與へられるであらう。人間は同一の境遇の下にありても、總て同樣に感じ又行動するのでない。併し一人をして一定の地位に於て一の仕方で、又他人をして他の仕方で、感

じ或は行動せしめるものは何であるか、如何にして感情及び行爲の一定の樣式が人性の一般的法則に適合して形成されたか、或は形成され得るかを決定する事は可能である。換言すれば人類は普遍的性格を有するものでないが、併し性格形成(the Formation of Character)の普遍的諸法則は存立する。そうして人間の行動及び感情の現象の全體が產出されるのは、各特殊的場合の事實と結合して作用する其等の法則に依つてゞあるから、具體的に、又實際的諸目的の爲めに、人性の科學を建設せんとする總ての合理的企だては、其等の法則を基礎として進まねばならぬ。

然らば吾人は性格形成の法則を確定する爲めに、如何なる方法を用ゆ可きか。此處に吾人の從ふ可き論理學的原理は、甚だ複合的なる現象の法則を探究せんとする總ての科學が、遵奉する處の論理學的原理であらねばならぬ。是れ何れの人間の性格も、亦其の性格が形成される諸事情の群も、共に甚だ複合性の大なる事實であるからである。そうして其等の論理學的原理に從へば、吾人は只觀察及び實驗によりてのみ性格形成の法則を發見することは出來ないので、夫れが爲めには一般的法則から出發して、其の推論の結果を特殊的經驗によりて徵驗する演繹的方法を使用せねばならないのである。要するに性格形成の法則は心意の一般的法則から生來する派生的法則にして、つまり吾人が諸事情の與へられたる一群を假定し、そうして心意の法則に從へば、其等の諸事情は性格形成上如何なる影響を及ぼすであらうかを考察して、心意の一般的法則から演繹

することによりて、獲得さる可きものである。

今右に述べしが如くにして、此處に性格の形成を究明する一の新しき科學が建設されてくるのであるが、夫れはよろしく性格學（Ethology 卽ち性格（エートス）の科學）と稱せらる可きである。性格學と云ふ語は語義から見れば、恐らくは吾人の知的及び道德的性質の全科學に適用し得られるであらうが、併し普通に又便宜上、心意の元素的法則の科學を稱するに心理學と云ふ語を用ゆるとすれば、性格學と云ふ語は其等の元素的一般的法則に從ふて、物質的及び精神的諸事情の一群によりて產出されたる性格の種類を決定する、一層複合的な科學を意味するものとして用ひらる可きである。そうして右の定義に從へば、性格學は個人的性格の形成並に國民的或は集團的性格の形成を含む最廣義の敎育術に、對應する科學である。

今性格學は人性の精密科學と稱し得られる。是れ其の眞理は夫れに依存する經驗的法則の如く近接的概括ではなくして、眞實なる法則であるからである。併し複合的現象を取扱ふ總ての科學に於けると同じく、性格學の眞理もヤハリ只假設的なものにして、傾向を肯定するが事實を肯定するものでない。其等の眞理は或物が常に或は確かに生起するであらうと斷言するのでなく、只與へられたる原因が他に妨げられずして作用する以上、是れ是れの結果を生ずるであらうと推斷するだけのものである。

又心理學は全く或は主として觀察及ひ實驗の科學であるが、性格學は全く演繹的科學である。前者は一般的に心意の單純なる法則を確定するが、後者は事情の複合的結合に於ける其等の單純なる法則の作用を跡附けるのである。かくて性格學は心理學に對して、自然科學の諸分枝が力學に對して有する關係と大に類似する關係を有するものである。併し嚴密に云へば性格學の原理は、心意の科學の中間原理(ミヂアルプリンシプルス)即ちベーコンの云ふ中間公理であつて、一方に於ては單純なる觀察から生來する經驗的法則から、又他方に於ては最高概括から區別されるものである。要するに演繹科學としての性格學は、實驗科學としての心理學から引き出される系論の一體系(a system of corollaries)であつて、心理學と社會科學との中間に立ち、兩者の連絡を媒介するものである。かくて社會科學が心理學に基いて健實に建設される爲めには、先づ性格學が建設されねばならないので、甚だ複合的な社會科學が直接に心理學に基いて建設されるには、心理學の眞理はあまりに單純な元素的なものである。然るに此の理は今日までよく理解されて居なかつた。そうして夫れが爲めに社會科學は健實に發達しなかつたのである。されば今日社會科學の健全なる發達を圖る爲めには、先づ性格學を創設することが最大急務である。

そうして今や性格學の創設が、遂に實現し得られる時機が到來して居る。其の演繹を徵驗するに必要なる經驗的諸法則は、人類進步の各時代によりて豐富に形成され、又其の演繹の前提とな

る可きものはかなり充分に完成して居る。個人心の自然的差異の廣さに關して、又其等の差異が依存すると思はれる物質的諸事情に關して、今尙ほ存在する不正確の度合を除けば、人性の構成諸要素の一般的諸法則は既に今日でさへも、堪能なる思想家をして、一般に人類間に於て何れかの事情の一群に依る形成される特定の性格定型を、かなり正確に其等の法則から演繹することを可能ならしめるだけ、充分に理解されて居ると思はれる。されば心理學に基いて性格學を建設することは今や可能である。但し夫れが爲めにはまだ僅かな仕事しか成就され居ない、又其の成就された僅かな仕事も、全く組織的に成就されて居ない。そうして此の重要な併し甚だ不完全な科學の進歩は、一の二重過程によりて成就される。其の一方面は當面の特殊的諸事情或は諸境遇の性格學的結論を理論的に演繹し、之を一般的經驗の承認されたる結果と比較することにして、他の方面は其の逆、卽ち世界に於て見出される可き人性の諸定型を詳しく研究することである。但し此の諸定型の研究は、單に其等の諸定型が夫れ〳〵存立して居る諸境遇を分析し、記錄し得るだけでなく、更に其等の諸境遇の諸特異性によりて、定型の特質を說明し得るだけ充分に心理學的法則を熟知する人々によりて行はれることが肝要である。尙ほ此の際境遇の特異性と心理學的法則とによりて說明し得られない殘餘があるとすれば、夫れは個人が生れつき有する性向に歸するものと認めらる可きである。

性格學にありても、總ての他の演繹科學に於ける如く、後天的徵驗は先天的演繹と相伴なふて進行せねばならぬ。與へられたる一定の諸事情によりて形成される性格の定型に關して、理論によりて與へられたる推理は、其等の諸事情の特殊的經驗によりて吟味されねばならぬ。そうして全體として性格學の諸結論は、吾人自身の時代に於ける人性に關する一般的經驗、及び過古の時代に關する歷史によりて與へられたる一般的注意(リマークス)によりて、斷へず徵驗され修正されねばならぬ。理論の結論は觀察によりて確かめられるに非らずば、信賴されることが出來ないし、又觀察の結論は夫れが人性の法則から、更に特殊な地位の諸事情の詳しき分拆から演繹されることによりて、理論に連結され得るものに非らずば、信賴されることが出來ない。そうして夫れ夫れ別々に行はれたる此等二種の證明の合致、卽ち先天的推理と特殊的經驗との合致が、性格學の如き甚だ複合的な具體的な現象を取扱ひ、深く事實に入り込む科學の原理に對して、唯一の充分なる土臺を造るのである。

さてミルが心理學の原理と社會科學の原理とを、適當に結び附ける中間原理を確立する科學として、新たに創設せんと企だてた性格學の概念は、大體に於て以上述べ來りしが如きものにして、彼は「論理學の體系」を公にした後、性格學の建設に力を注いで居た樣であるが、併し彼は之を大成することが出來なかつたのみならず、遂には之を大成せんとする企圖すら放棄した樣であ

る。そうして專ら經濟學の研究に力を用ひ、千八百四十八年に「經濟學原理」を公にしたのである。然らば彼が方法論上から見て、上に述べしが如くに社會科學の直接の基礎として甚だ重要視した性格學を、何故に建設することが出來なかつたか。是れはミル其人の社會科學論の批判的考察に於て甚だ興味ある又重要なる一問題であるばかりでなく、社會學論の發達史上から見ても亦甚だ重要なる一問題であるので、余は後にミルの社會科學論を批判的に考察する場合に、彼が何故に彼の考案せるが如き性格學を實際に建設することが出來なかつたかを論究し、其の失敗の理由を究明することによりて、彼が社會科學の直接の基礎として新たに建設されねばならぬと覺つた其の科學は、本來如何なるものである可きかを明らかにして、以て余の純正社會學と稱するものの學問論的性質を闡明したいと思ふが、本論文に於ては只彼が方法論上から考へて、性格學と命名して新たに創設せんとせるものは、大體上如何なるものであつたかを示すだけに止める。併し彼の性格學の概念を充分に理解して之を批判的に考察し評價する準備として、尙は此處に論究して置かねばならぬ一問題がある。夫れはミルが一切の社會科學の直接の基礎となる可きものと考へた性格學の外に、更に一の特殊社會科學として建設せんと企だてた集團性格學(Political Ethology 直譯すれば政治的性格學となるのであるが、併し此處にミルが Political と云ふは政治的と云ふ意味ではなく、汎く集團的と云ふ意味であると思ふから、集團性格學と譯して置く)と稱するもの丶概念である。余はミルが集團性格學と稱せるものの概念を考察することによりて、彼の性格學の概念を

更に詳しく理解することが出來ると思ふのであるが、然らば彼が集團性格學と稱せるものは大體上如何なるものであるか。

(三) 集團性格學の概念

「ミルの經濟學概念」中に述べし如く、ミルは特殊社會科學は彼の物理學的方法或は具體的演繹法と稱するものを用ひて、建設さる可きものと考へ、そうして特殊社會學の一として先づ經濟學の概念をやゝ詳しく論述したのであるが、今彼は經濟學の概念を論述した後、左の如く述べて居る。

「余は此處では、經濟學と同樣なる如何なる他の假設的或は抽象的諸科學が、社會科學の全體から切り分け得られるか、社會現象の如何なる他の諸部分が、先づ第一に原因の特殊な一部類に、其等の原因の豫備的一科學を創設するを便宜とするほど、充分密接に又完全に依存して居るが(其等の原因を通じて、又は其等の原因と協力して働く諸原因の考察は後に讓るとして)を、決定せんとは敢て企だてないであらう。併し其等の別々な諸部門(或は特殊社會科學)の中で、此處に看過され得ない一部門(或は一特殊社會科學)がある。是れ其の一部門或は一分枝は、社會科學が區分され得る他の諸部門の何れよりも一層包括的な又重要な或は基本的な性質を帶びて居るか

らである。此の一分枝も他の諸分枝の如く、直接には只社會的事實の一部類だけの諸原因を取扱ふものであるが、しかも其の一部類たるや、殘りの總ての部類の上に、直接又は間接に重大なる影響を及ぼすものである。そうして余が此處に諷示する處の其の社會科學の一分枝とは卽ち集團性格學と稱し得られるもの、つまり一國民又は一時代に屬する性格の定型を決定する諸原因の理論である。』

右に引用せる言葉によりて學ばれる如く、ミルは彼が集團性格學と命名して新たに建設せんとする特殊社會科學を大に重要視し、之れに特殊社會科學中特別な地位を認めて居たのである。此の事は彼が性格學を以て一切の社會科學の直接の基礎と見る思想と密接に結び附いて居るので、吾人は此處に彼が單に性格學と稱するものと特に集團性格學と稱するものとの關係、及び特殊社會科學に於て彼が集團性格學に認める地位等に就て、更に論究せねばならないのであるが、先づ彼が集團性格學と稱するものゝ概念其物を、尙ほ少し詳しく述べて置きたいと思ふ。

今ミルの論ずる處によれば、社會科學の一切の從屬的諸分枝の中で、彼が集團性格學と命名して創設せんとするものは、甚だ幼稚な狀態にあるので、國民的性格の諸原因は殆んど全く了解されて居らず、又國民の性格に及ぼせる社會的諸制度の影響は、夫れが及ぼせる諸影響中最とも注意される事の少なき、隨ふて殆んど理解されて居ない部分である。併し此の事は敢て驚くに足ら

ないので、是れつまり集團性格學の基礎たる性格學が甚だ幼稚なるが爲めである。集團性格學の眞理とは、つまり性格學の法則の結果及び例解に外ならぬものである。

しかも社會科學を概觀すると、國民的或は集團的性格の法則は、社會科學的法則中の最とも重要なる部類である事は明白である。先づ第一に社會的事情の何れの狀態によりて形成されたる性格も夫れ自身に於て、社會の其の狀態が產出し得る最とも興味ある現象である。第二に其の性格は又一切の他の現象の產出に於て、重要なる役目を演ずるものである。そうして殊に國民の性格卽ち國民の思想感情及び習慣は、主として夫れに先立つ社會の狀態の結果であるが、併し又夫れに續いて起る社會の狀態の主要なる原因であるので、社會の人爲的なる諸事情、例へば法律及び慣習の如きは、全く國民的性格の力に依て特定の型に於て形成されるのである。慣習は云ふまでもないが、法律も實際に於ては同樣に、支配的勢力の上に公衆感情の及ぼす直接の影響によりてか、又は國民的思想及び感情の狀態が政治形體を決定し、支配者の性格を形成することに於て生ずる結果によりて、產出されるのである。

從來又は今日の狀態からして豫期され得る如く、夫れ夫れ別々な科學として研究されて來た社會科學の諸分枝に於て其の最とも不完全なる部分は、其等の諸分枝に於ける結論が性格學的事情によりて影響される仕方の理論である。もつとも此の事は抽象的或は假設的科學としての其等

の科學に於ては、決して缺陷ではないが、併し一の包括的な社會科學の諸分枝としての實際的應用に於ては、其等の科學の效果を大に傷害するものである。例へば經濟學に於ては、只英國及び米國に於てのみ適用される人性の經驗的法則が、英國の經濟學者によりて默諾的に前定されて居る。殊に一般的な商業的事實としては只此等の二國以外の何れの國にも存在しない激しき競爭が、常に前定されて居る。英國經濟學者は彼の國人一般と同じく、人々は店の品物を販賣するに當つて、金錢上の利益よりも一層多く、生活の安易や又は虛榮心を重んずることがあり得ることを殆んど覺つて居ない。併し歐洲大陸の習慣を知る人々は、金錢上の利益を直接の目的とする取引に於てさへも、如何に見掛上つまらない動機が屢々金儲けの慾望を壓倒するかを承知して居る。要するに性格學が益々發達し、個人的及び國民的性格の差異が益々よく了解されるに於ては、恐らくは吾人が人性の普遍的原理として、安心して樹立し得る命題の數は益々減少するであらう。

上述の考察は、社會科學を諸部門或は諸分枝に區分し、先づ其の各部門或は分枝を別々に研究し、そうして後に其の各部門の結論を、他の諸部門の教ゆる處を斟酌することによりて、實際的應用の爲めに修正すると云ふ過程に對して、少なくも一の重要なる制限が加へられねばならぬことを示すのである。要するに只諸國民間或は諸時代間の性格の差異が、第二次的に影響する原因

として入り込む社會現象の諸部分のみが、一時的にせよ、有益に社會科學の相別れたる諸分枝の對象とされ得るので、之れに反して國民の性格學的狀態の影響が各歩に混入する社會現象は、何等の便利を以ても、否な大なる不便利なしにさへ、集團性格學から獨立して、隨ふて國民の諸形質が影響される一切の事情を離れて、取扱はれることは出來ないのである。そうして此の理由及び其他の理由によりて社會科學の區分されたる一分枝としての政治學(the Science of Government)は存立し得ない。是れ政治は特定の國民或は特定の時代の諸形質と、之を原因及び結果の兩者として、最とも多く混交する事實であるからである。かくて政治形體の諸傾向に關する一切の問題は、一般的社會科學に屬するものにして、其の區分されたる何れかの分枝に屬するものでないのである。

ミルが集團性格學と稱するものは、如何なるものであるかは、以上述べ來りし處によりて大體上理解され、又夫れによりて彼が單に性格學と稱するものゝ概念は、一層明かに理解されると思はれるが、併し詳しく吟味して見ると、彼の性格學と集團性格學と社會科學との三者の關係は、甚だ曖昧であることが見出さるのである。それで余は終りに此の三者の關係を論究することとする。

(四) 性格學と集團性格學と社會學との關係

先づミルが單に性格學と稱するものと集團性格學と稱するものとの關係を考察するに、方法論的には性格學が基本科學にして、集團性格學は其の一派生科學であることは明白にして、彼はさきに述べし如く、集團性格學の眞理は性格學の法則の結果及び例解に外ならぬものであると云ふて居るのである。併し彼の方法論の一般的原則によれば、啻に集團性格學のみならず、一切の社會科學は性格學の派生科學である可きである。然らば性格學の派生科學としての集團性格學と他の社會科學との關係は如何にある可きか、總ての社會科學は性格學の派生科學として同位にある可きものであるか、又は其の間に上下の位別が存在す可きか。上に述べし處によりて知られる如く、ミルは先づ特殊社會科學間にありては集團性格學に上位を認めて居た。卽ち彼は集團性格學は社會科學の諸分枝中何れのものよりも一層包括的な又基本的な性質を有するものであると見て居た。更に彼は集團性格學の及ぼす影響の大小如何を、特殊社會科學の存立の標準と見て居た。卽ち集團性格學の對象たる國民及び時代の性格が、只第二次的原因として入り込む社會現象の部類に就てのみ、特殊社會科學が成立し得るので、其等の性格が第一次的原因として作用する社會現會の部類に就ては特殊社會科學は存立し得ない、隨ふてかゝる社會現象の部類は一般的社會科

學に屬するものと考へたのである。

然るに今ミルが集團性格學に上位を認める右の思想を、論理的に推し究めて行くと、結局集團性格學は彼自身の言明して居るが如くに、社會科學全體の一分枝卽ち一の特殊社會科學ではなくして、社會科學全體其物卽ち一般的社會科學の一部分であるか、又は性格學と密接に結合して、方法論的に一切の社會科學の前に立つ處の其の直接の基礎であるかの、何れかで有らねばならぬことゝなる。彼の云ふ如く、國民的性格或は時代的性格が第一次的原因として作用する社會現象の部類に就ては、特殊社會科學は成立し得ないので、其等の社會現象は社會科學全體或は一般的社會科學の對象の一部分をなす可きものとすれば、國民的性格や時代的性格其物は勿論一般的社會科學の對象の一部分であると認められるか、更に進んで、方法論的に一切の社會科學の直接の基礎と考へられる性格學の對象の一部分であると認められねばならない。他の特殊社會科學が成立すると同樣な方法論的意味では、集團性格學は到底特殊社會科學として成立し得るものではないのである。

然らばミルの社會科學方法論の精神に從ふて推論して行けば、集團性格學を一般的社會科學の一部分と認める可きか、又は一切の社會科學の直接の基礎と云はれる性格學の一部分と認める可きか。さきに述べし如くミル自身も明かに、性格學は個人的性格の形成並に國民的或は集團的性

格の形成を含む最廣義の教育術に對應する科學であると云ふて居るのであるから、集團性格學を性格學の一部分と見做し、そうして個人性格學と集團性格學との二部分を包括する全體としての性格學が、一切の社會科學の直接の基礎であると見るのが、ミルの眞意であつたと考へ得られる。併しそう考へんとするに當つて先づ吾人の注意せねばならぬことは、集團性格學の概念の精確なる意味である。

今ミルが集團性格學と稱するものは、只一般的に集團的性格一般の形成を研究するだけのものであるか、更に個別的或は特殊的な集團性格の形成をも研究するものであるか。若し前者の意味であるとすれば、集團性格學は性格學の一部分にして、そうして一切の社會科學の直接の基礎であると云ふことが出來る。併し若し後者の意味であるとすると、集團性格學は一部分は性格學の一部分にして、一部分は特殊社會科學を構成するものであると云はねばならぬ。要するにミルの集團性格學なるものは嚴密に考ふれば二つの部門に別たれ、其の一部門は集團性格一般の形成を研究する一般的集團性格學にして、他の部門は特殊的集團性格を研究する特殊的集團性格學である可きである。そうして一般的集團性格學としては性格學の一部分となり、特殊的集團性格學としては、一の特殊社會科學を構成するものと認めらる可きである。然るにミルは右の區別を明確に定立しなかつたが爲めに、一方に於ては集團性格學を性格學の一部分と認めながら、他方

に於ては之を特殊社會科學と認め、しかも之れに上位を認めるが如き混亂を生じたのであると思ふ。

併し右に述べし如くに集團性格學を一般的部門と特殊的部門とに大別して考へるに於ては、一般的集團性格學を性格學の一部分と見ずして、一般的社會科學の一部分と見ることも出來る。ミルはさきに述べし如く、集團性格が第一次的原因として作用する社會現象の研究は、何れの特殊社會科學にも屬せずして、一般的社會科學に屬するものであると云ふて居るが、其の主意を敷衍して行けば集團性格一般の研究も、一般的社會科學に屬すると云ひ得るのである。しかも性格學は一切の社會科學の直接の基礎であると云ふ彼の思想から考へて、余は一般的集團性格學を性格學の一部分と認め、そうして其の全體に於て一切の社會科學の直接の基礎であると見るのが、一層よくミルの主意に適合すると考へるのである。要するに余は先づ集團性格學を一般的と特殊的とに大別し、一般的集團性格學を性格學の一部分と見て、以て性格學を一切の社會科學の直接の基礎と認め、次に社會科學を一般社會科學卽ち社會學と特殊社會科學とに大別し、そうして特殊的集團性格學を一の特殊社會科學と見れば、ミルの社會科學論の主意を論理的に最ども正當に言表し得ると考へるのである。

併しミル自身は右の如くに意識的には考へて居なかつた。そうして彼の集團性格學の概念は上

に述べし處によりて知られる如く曖昧であつたので、又其の影響を受けて彼の性格學の概念も曖昧であつた。かくて性格學と集團性格學と社會科學との三者の關係に對する彼の思想も、彼の論述するがまゝでは、甚だ曖昧なものであつたのである。されば彼が性格學を建設することが出來ず、又遂には之を建設せんとする念をも放棄するに至つたのは、彼の性格學の概念の曖昧であつたことに基因する處少なくないと思はれる。併し假令彼は余が上に述べしが如くに性格學の概念を明確に規定したとするも、彼の云ふが如き意味では性格學は、一切の社會科學の直接の基礎としては、學問論上到底建設し得られるものではないのである。そうして彼が性格學と云ふが如きものを正當に解するに於ては、夫れは決して社會科學の直接の基礎として、社會科學以外に建設さる可きものでなく、一般的社會科學卽ち社會學の一部分、否な其の根本的一部門として余が純正社會學と稱するが如きものとして、始めて正當に建設し得られるものである。

さて余は「ミルの社會學概念」、「ミルの經濟學概念」及び本論文に於て、ミルの社會科學論をかなりに詳しく論究したから、以下の諸論文に於ては、さきに「ミルの社會學概念」中に述べし主意に從ふて、彼の社會科學論を批判的に考察し、其の今日の社會科學論上に於ける意義を闡明すると共に、余の社會科學論の根本思想を陳述したいと思ふ。